

次の文章は、日本人の数学者がアメリカで研究生生活を送った時のことを述べたものである（文章の一部を変えたところがある）。これを読んで後の問いに答え、解答用紙に記せ。

友人のカール・ノートンは、一九五センチもある身体を、ぎこちなさそうに私の研究室の肘掛椅子に押し込んでいた。三十五歳という若さにもかかわらず、頭部の金髪はかなり後退していて、額がやけに広く見える。眼鏡の奥に光る目が、研ぎ澄まされた知性を表わすかのごとく、時々鋭く光る。

彼は半年ほど前の一九七三年春に、六年間勤務したコロラド大学を解雇された。理由は簡単だった。彼はあまりにも多くの学生を落第させてしまったのである。ある学期にはクラスの三分の二を不可とした。その理由も単純明快で「及第させるほど出来なかった」からだ。憤慨した学生たちは続々と数学教室主任の所へ不平不満を訴えにやってくる。投書したりした。中には人文科学部長に直訴する者まで出てきた。彼らは、異口同音にカールが厳格すぎると言った。事態の重大さを憂慮した主任はカールに対し、い幾分か寛大さを示すよう忠告した。しかし彼はこれに従う気持は「①」なかった。彼に言わせると、最近の大学生は周囲の温情主義に甘やかされているうえ、もともと大学で学問を学ぶ資質のない者が多すぎるのだった。そして、出来が悪く怠惰な学生を落第させるのは正義であり、教授としての義務でもあると考えていた。

毎学期のようにクラスの半数近くを落第させるので、実態調査のため、教室の学部教育委員が彼の授業を参観したり、クラスの学生から事情聴取をしたりした。彼の教え方に問題があるのではないかと「②」。しかし、その結果によると、彼はどの授業に対してもきわめて周到な準備をしていたし、採点は公平無私かつ良心的で、そのうえ、教え方も要点をついていて「③」。また、試験問題を集めて検討してみたが、他の教官のものと比較して、それほど難しいという結論も引き出されなかった。A委員会の面々もハタと困ってしまった。信じ難いことではあるが、カールのクラスだけに毎学期、運悪く、出来の悪い学生が集まってしまうということも考えられないではないからだ。とにかく調査結果は、委員会の予想に反して彼自身の言っていたことを裏付けるだけのことになった。私も、彼が良心的すぎるほど良心的であり、稀に見るほどに責任感と正義感の強い人間であることは十分知っていた。従って彼の言うことはいつでもそのまま信用することにしていくくらいだ。

研究室の開かれたドアから話す内容が外部にも構わず、カールは彼特有の張りのある声で事の経緯を私に話し続けた。事実を誇張したり歪曲しないように注意深く単語を選びながら話す様子は、几帳面さをそっくり反映していた。ふと耳に入れたカールの解雇事件に、私が大変な興味を示したので、自らある日の午後をさいて説明に来てくれたのである。通常、大学を解雇される場合は、研究者としての能力が理由とされる。その際には論文というエグゼグティブの判断材料があるので、その評価に主観の混入は避けられないとは言え、当人は不満ながらも納得することが多い。しかしカールの場合は、教育能力が理由となったきわめて例外的なケースであった。研究者としての彼は高く買われていた。エール大学を最優

等で卒業後、イリノイ大学で Ph・D を取り、すぐコロラド大学に就職したのだが、その間に、イギリスに留学したり、プリンストンの高等研究所に長期研究員として滞在したこともある。専門は解析的整数論と呼ばれる分野で、特に算術的函数に関する造詣は深く、既にいくつもの優れた論文を発表していた。彼を昇進させるか、あるいはさせない、すなわち、解雇するか、に関して教室の意見は二つに割れた。彼を擁護する人々は、彼の研究者としての素質および業績を高く評価した。他方は、彼の教育者としての欠陥を大きく取り上げ、同時にこの機会を捉えて教育の重要性を強調しようとした。

実はこの二つのグループの反目はその時に突然現われたものではなく、長い間にわたってくすぶり続けていたものであった。「④」、教育も研究と同等に重要であるとする A グループと、研究至上主義の B グループの二つが、事あるごとに対立を続けていたのである。同様のことは日本でも見られるが、アメリカの主要大学においてはそのオヨウソウがかなり異なる。段違いに深刻なのである。と言うのは、どちらの意見が重視されるかにより、言い換えれば、どちらのグループの勢力が優勢であるかによって、各教授の年収に直接的な影響が出て来るからである。一般的に、アメリカの主要大学では、教授の給与は主に研究業績によって左右される。日本におけるそれが年齢に依っているとカタイシヨウテキである。例えば、コロラド大学のシュミット教授は、まだ四十三歳という若さでありながら、その世界的な研究業績を認められ、四十人ほどの教室員の中でも三本の指に入っている。すなわち、少壮有名教授が六十三歳の停年間近の平凡な教授より、はるかに高い年収を得ているのである。従って、研究能力、あるいは研究意欲の高い人々は大体、「⑤」グループに属することになる。これに対して「⑥」グループの人々は、大学の機能には研究だけではなく、教育および運営などもあり、どれも軽視されるべきではないと考える。従って、給与を決定する執行委員会は研究上の業績だけに捉われず、教育上の功労も大いに考慮すべきであると考えている。こういった考えは、それほど研究意欲はないが、学生教育に熱意を傾けている人々とか、各種の委員会で活躍中の人々、管理職の人々などから支持されている。年齢の点から見ると、若い教官は大学院の頃から研究至上主義に徹底的に洗脳されて来ているし、それを信じない限り数学者として生存して行くことは出来ないことをキハダミで知っているから、ほぼ全員が当然のごとく「⑦」グループに入る。一方、老教授の多くは、新たな意欲的研究を始めるには肉体的、精神的に疲れてしまっている人が多い。殊に、数学研究は他の諸分野に比べて経験という要素があまり役立たないから、いかにクトシオいていようとも、研究しようとする限り、若手と対等に張り合わねばならず、大変に骨の折れるものなのである。従って彼らの中では「⑧」グループに入る者が多い。

(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』による。)

問1 傍線部ア、イ、ウ、エの読み方を平仮名で記せ。

問2 傍線部オ、カ、キ、クの片仮名の部分を漢字を使って記せ。

問3 空欄①に入る語として適切なものを次の中から一つ選んで記号で答えよ。

- 1 さぞ 2 毛頭 3 是非 4 一定 5 大変

問4 空欄②に入る表現として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- 1 疑ったのである
2 疑ったゆえんである
3 疑ったはずである
4 疑ったところである

問5 空欄③に入る表現として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- 1 非の置き所があった
2 非の置き所がなかった
3 非の打ち所があった
4 非の打ち所がなかった

問6 傍線A「委員会の面々」について、どういう意味か、言い換えた表現として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- 1 委員会の出席者の表情
2 委員会の委員の人たち
3 委員会の委員長と副委員長
4 委員会の会議の場面

問7 空欄④に入る最も適切な接続詞を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- 1 すなわち
2 さらに
3 しかし
4 したがって

問8 空欄⑤⑥⑦⑧に、それぞれ「A」「B」のいずれが入るかを記せ。

問9 「カール・ノートン」が解雇されたことについて、あなたは賛成か反対か、「カール・ノートンの解雇」という言葉から文を始め、「そう考えるのは」という言葉を使って、そう思う理由を入れて、八〇字以上一二〇字以内であなたの意見を書け。

